

實川 風

2019年
10月5日(土)

開場17:30/開演18:00 入場料:会員3,500円/
一般5,000円/学生2,500円(全席自由席)

123
Mitake Sayaka Salon (vol.43)

～ある風景の中で～ vol.2

<プログラム>

リスト：コンソレーション(慰め)第1番、第2番(1850)

モンポウ：湖(1942)

サティ：ノクターン第3番(1919)

プレリュード「ビックリ箱」より(1899)

瞑想曲「最後から2番目の思想」より(1915)

ケージ：ある風景の中で(1948)

ショスタコーヴィチ：前奏曲とフーガ ニ短調 作品87-24(1951)

ラフマニノフ：コレルリの主題による変奏曲 ニ短調 作品42(1931)

ポール・マッカートニー＝武満徹：ゴールデン・スランバー(1969,1992)

*プログラム等は、やむを得ない事情により変更になる場合がございます。

<プロフィール>

實川風(Jitsukawa Kaoru) Piano

2015年ロン・ティボー・クレスパン国際コンクール(パリ・フランス)第3位、最優秀リサイタル賞、最優秀新曲演奏賞を受賞。2016年カラーリョ国際ピアノコンクール(カラーリョ・イタリア)にて第1位を受賞。本格的に国内外での演奏活動を広げる。

ベートーヴェンを核とした重厚なレパートリーに取り組む一方、邦人作品の初演でも作曲家より指名を受け携わる。

海外の音楽祭への招待には、上海音楽祭、ソウル国際音楽祭、ノアン・ショパンナイト(フランス)・アルソレ(オーストリア)がある。

東京藝術大学附属高校・東京藝術大学を首席で卒業し、同大学大学院(修士課程)修了。
山田千代子・御木本澄子、多美智子、江口玲の各氏に師事。グラーツ国立音楽大学ポストグラデュエイト課程にて、マルクス・シルマー氏に師事。



©Christian Jungwirth



實川 風

ある風景の中で vol.2

123
Mitake Sayaka Salon (vol.43)

2019年10月5日(土) 開場17:30/開演18:00 入場料: 会員3,500円/一般5,000円/学生2,500円 (全席自由席)

深化し続ける『實川風・未体験ゾーン』

本格派として活躍される實川風さん。パリで開催される名門ロン＝ティボ＝クレスパン国際コンクールにて2015年、1位なしの第3位を受賞して以来、その活躍はとどまることを知らず今も聴衆を魅了し続けています。

昨年プロデュースした本シリーズでは、まるでプラネタリウムのような五感を研ぎ澄まして体験する、芸術が詰まった空間が大好評を博しました。

そんな「實川風セレクト」の沈黙から生まれる美しさを捉えた作品の数々は、常に自然体で音楽に向き合う彼の姿勢と相通ずるものがあるようです。

今年は何んな風景が描かれるのでしょうか。

プログラムや企画の意図について伺いました。

最近サティの世界がとても居心地よくなっています。よく演奏されるのは「ジムノペディ」や「グノシエンヌ」など、初期に書かれたいくつかの曲集ですが、サティは膨大な数のピアノ曲を残していて、年を重ねるごとに音楽がさらに先鋭化されていきます。実は、最近分厚い3巻からなる「ピアノ曲全集」を購入したんです(笑)

サティといえばどこか退廃的な美しさが印象的な作品が多いように感じられますが、どんなところに魅力を感じているのでしょうか。

とにかくアンチアカデミズムというか、反芸術主義的な考えをずっと持っていた人だったんだと思うんです。音楽で文学的な情景や、主観的で個人的な感情を表現するのがベートーヴェン以降では当たり前でしたが、そういった表現を捨てて、客観的で即物的、この世に実在しないユートピアのような音世界を作ってしまった。同時代のドビュッシーやラヴェルもかなり影響を受けているので、いち早く20世紀の扉を開いた人だと思います。

なるほど。客観的に俯瞰することで自然と現れてくる理想的な音世界ということでしょうか。ベートーヴェン以降の感情表現が行き過ぎた音楽への反作用ともれますね。あらためて、クラシック音楽は時代を反映していることに気付かされます。

昨年に引き続き、今年も静寂から生まれる「美」がテーマのように感じられますが、どんなプログラムになっているのでしょうか。

今回は昨年に引き続き2回目ですが、扇情的なロマンチックさや、名技性で満たされたコンサートが多い中で、僕自身もお客様も息抜きの意味で「静寂」にスポットを当てたコンサートがあってもよいかと思います。今年もラインナップを変えて演奏したいと思います。

後半の2曲は20世紀ソヴィエトの作曲家の音楽ですが、サティとは全く異なるロマン主義的な瞑想と、20世紀前半の情勢不安からくる張り詰めたよ

うな緊張感が入り混じった、重厚感のある2曲です。

自然体な實川さんだからこそできるプログラムとも言えるでしょう。實川さんが紡ぐピアノの音は、常に自然な音のエネルギーの流れにまかせて、心地よく進んでいきます。

いつもどんなことに意識を向けて演奏されているのでしょうか。

演奏をするときは、作曲者が作品に託したエネルギーや世界を、どうやって聴いている人にも共有してもらえるかをいつも考えています。人とは違うオリジナリティを出そう、と何かをするのは実は簡単なのですが、他作品のストーリーテラーに徹しつつ、自分にしか出せない味わいが自然と滲み出てくる境地というのはとても大変です。その次元を目指していきたいと思えます。

たしかに、本物のこだわりとは必然的に視野の広さから生まれるような気がします。

コンサートピアニストにとって、決して忘れてはならないのが作曲家との対話、そして作品との対峙です。現代を生きるピアニストにとって、もっとも欠けてはならない要素の一つではないでしょうか。實川さんは以前のインタビューで「作曲家と演奏家である自分と聴衆と三位一体となり、曲に秘められた作曲家からのメッセージを、そのまま素直に伝えられるような演奏家でありたい——」そうお答えいただいたことを思い出しました。

本当の意味での「個性のある演奏」というのは自分で何か図るのではなく、音楽に秘められたメッセージを解き明かし、刹那的で尊いときの芸術としての音楽を慈しみ、今に伝えることなのだと思えます。

最後に、20世紀以降の作品に取り組む魅力を教えてください。

ベートーヴェンやシューベルトが弾いていたピアノと現代のピアノはまるで別物なので、彼らの作品を演奏するときにはモダンピアノで音を作っていく際に工夫が必要なのですが、現代のピアノがほぼ完成された20世紀以降の作品ですと、作曲者の想定していた音色に近い音のイメージが掴みやすく感じます。あと、演奏上の「慣習」「伝統」というものの積み重ねが少ない分、肩の力を抜いて演奏することができます。

静けさのなかで自然に生まれる未体験の音世界に、今年も期待せざるを得ません。美竹清花さんの木の香りを感じながら、五感を研ぎ澄まし、その瞬間に生まれる音楽を体験してみませんか。深化し続ける『實川風・未体験ゾーン』に、いまからワクワクしてしまいます。(美竹清花さん)



日本のトップクラスの若手演奏家が、
こだわり抜いた価値ある企画をお届けしていきます。
美竹清花さんが追求する“本物の音楽”は、
演奏者と参加者とわたしたちの、
三位一体の努力と対話から生まれます。

誕生。
クラシック音楽サロン、
宮益坂、
渋谷駅 徒歩2分



●お問い合わせ

株式会社 ILA (美竹清花さん)

東京都渋谷区渋谷1-12-8 (〒150-0002)

☎ 03-6452-6711 (平日 9:00-18:00)

070-2168-8484 (時間外可)

Fax 03(3409)0188

